

二〇二〇年六月一九日

枝かぶせ合ふ古城址の大緑蔭
どくだみの十字明るき厨窓
奥の間の三味の音洩るる青簾
モノクロの映画懐かし梅雨籠
近道はけもの道なり木下闇
汗拭かず由緒をあつく老ガイド

二〇二〇年六月一八日

地蔵尊の供花なき今日の
線香の火付きの悪し梅雨じめり
上がり根に苔の花咲く千年樹
うずたかく何処から崩さうかき氷
道を問ふ人見当たらず立葵

二〇二〇年六月一七日

緑蔭や静かに閉づる文庫本
目の前に傘寿の迫る更衣
整へて水色涼し夏布団
畑の幸青菜づくしの夕餉かな
追熟の青梅かほる厨かな
庭の池どこから来たの青蛙

二〇二〇年六月一六日

家中のカーテン洗ひ風涼し
大阪城見えゐて遠し桐の花
投葉の袋の湿り走り梅雨
こむら返り今夜も来さう梅雨の冷

なつき	うつき	もとこ	更紗	ひのと	たか子	満天	ぽんこ	たか子	宏虎	やよい	せいじ	はく子	こすもす	明日香	やよい	智恵子	やよい
-----	-----	-----	----	-----	-----	----	-----	-----	----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----

二〇二〇年六月一五日

甲羅干す亀にとどまる糸とんぼ
梅雨晴間ベランダに出て深呼吸
緑風や媼の和讃のびらかに
夜更かしに短夜さらにちぢめたる
燕の子鳴きたる後の疲れやう
鮎焼きてたかだかと尾の跳ね上がる
湯上がりのテラスの風に足す団扇
古民家の高き敷居や梅雨の土間

二〇二〇年六月一四日

暫くは草の匂ひす螢の手
妙見のリフト足下の濃紫陽花
ブーケ舞ふグリーンチャペルや風薫る
胸張りてモデル歩きや羽抜鶏
小流れの暮れて螢の夜となりぬ

二〇二〇年六月一三日

ほうたるの葉裏で灯る青さかな
草茂る標の裏にお題目
深爪の指も酸っぱし夏蜜柑
幼みな頬に畳み目昼寝覚

なつき	満天	菜々	はく子	たか子	ひのと	たか子	うつき	よう子	みづき	智恵子	うつき	みづき	うつき	よう子	素秀	宏虎
-----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

毎日句会みのる選・二〇二〇年六月二日